

# 土 淨

昭和十年五月二日 第三種郵便物認可 (毎月一回一日発行)  
昭和二十四年四月二十八日 遷 (特別授承認雜誌) 第三五二号  
昭和四十七年三月二十五日印刷 和四十七年四月一日発行

第三十八卷

第四号

1972  
4





—目 次—

表紙 「宇治平等院」松涛達文画

新は真実……………齊 藤 英 明…… (2)

私の「青春」…………… (4)

伊藤現芳・二本松聖順・野上幸・吉川哲雄

法然上人と私……………竹 中 信 常…… (10)

御忌会法話 晩年の法然上人……………岩 井 信 道…… (15)

聖典解説③「一紙小消息」……………岸 覚 勇…… (18)

異僧「真覚」第四回……………柴 田 六五郎…… (21)

浄土宗史夜話③ 梧葉のさとり・苦難のおしえ……………三 田 全 信…… (24)

仏教の手びき② 仏教の宗派について 〈天台と真言〉…………… (28)

「道」十輪寺への道……………高 橋 良 和…… (30)

浄土宗列祖の墨蹟をたずねて…………… (32)



## 語和声念

### 春を賛う

釈尊の降誕は四月八日と伝う。灌仏会あるいは花祭りとして、永く日本民族にも親しまれ、また豊かな情操を養ってきました。幸にも日本は四季が明らかで、そのなかでも陽春の頃は、万物生成のすがたをまのあたりにみることができ、生命感の充実を身をもって知ることができるのは仕合せである。かつて若き日、緑にかこまれた雑木林に一人あって、泌々と生命の深さを感じ、感動したことが思い出されます。その時今の帰命無量寿仏の信仰があったら、どんなにか仕合せであつたでしょう。しかし、その生命の深さを体験したことは、今日の無量寿仏への帰依へつながるものであると信じたい。四月七日は法然上人の御誕生日であることもくしき因縁であると思います。上人は御承知のように専修念仏のお方であります。無量のおん命、無量のみ光をもち給うあみだぶつ一仏への帰依者であられました。愚かなるものの如く、一なるものへの帰依者でありました。仏法には無量の仏・菩薩（ぼさつ）がまします。その中で一仏のみに帰依されたということは稀有のことです。

現代は万事につけて多様化の時代と言われます。今後はもつともつと複雑化していくものと思います。この複雑さに堪えず、単純を望んでヒッピーなどのかたちをとって生活するものも、世界にはふえています。この多様化の時代には選択が絶対に必要であります。本を読むにしても、テレビを見るにしても、この選択ということを怠れば、限りある人間は現代というものに押しながされてしまいます。法然上人はこの選択を重んじられました。帰依の仏にしても一であります。この一にすべてをふくんでいるのであります。一なる生命は無量であります。春のいのちの花束も、せんずれば一なるいのちであります。万葉の花もその根源は一なる生命であります。無量寿（かぎりなきいのち）仏は万物の根源であります。この根源の把握は選択によってのみ、われわれに通ずるものであります。

（佐藤良智）

## 新は真実

四月は、わたくしの最も好きな月である。街へ出ると、若々しい母親たちが幼稚園に入る子供、また小学校に入學するであろう子供を連れて調歩している。そして、新しい学用品などを買っている姿が、ほほえましくも春の日ざしに輝いて美しい。

わたくしは、高校と短大と保育専門学校とを経営している。四月ともなれば校内には三百年余もたった樺の大樹が新芽をふきはじめる。桜の木々は三分咲か五分咲の頃である。新しい服装の新入生が颯爽と校門をとぐってくるのである。力強く新鮮に感じられる。わたくしは、これらの学校の入学式に次々と出席してお祝いの挨拶を



〈学校法人林昌学園理事長〉  
酒田経済短期大学長

齋藤英明

のべる。まことに新鮮な気分になり、楽しいものである。また、この月はわが浄土宗の各寺院では元祖法然上人さまの御忌法要を行っている。そして、市内の各寺院は互に随喜しあつて、各住職らが久々に一堂に会して歓談しあう。これらの寺々でわたくしは、檀信徒の皆様方にお説教などを通じて親しく呼びかけるのが通例である。この日がまた年中行事のうちでも最も待ち遠しいものの一つである。

わが国、源平争乱のとき、新たな信仰の灯をかがげられた法然上人さま。そのお言葉の数々は今なおわたくしたちの心に新しくひびくのである。そして、いまだにわ

たくしたちの胸を強く打ち心のささえとなつてゐる。関白九条兼実公の願いによりお書きになられた選択集の新しさ。この新しさは桐尾の明慧上人をして驚倒せしめ、当時の仏教界に大きな波紋を呼びおこしたのである。これは余りにも有名な話である。

また、法然上人さまご臨終間近のときのことである。

門人らは、法然上人さまに、古来の祖師みな遺蹟あり、上人ご往生後の遺蹟はいずこに定むべきか。との間に對し、上人さまは、蹟を一廟に止むるは、遺法普ねからず、海人漁人が苦屋まで念仏の声するところみなわが遺蹟なり。といわれたお言葉などは、いつまでも新しくわたくしたちを感激させるのである。

わたくしの手もとに、伏見天皇第六王子尊円親王のご真筆で、法然上人さまご開宗のときのご文章、すちわち、「一心専念弥陀名号……願彼仏願故」(善導大師さまのお言葉)の幅物がある。尊円親王は、藤原行房、行尹らの書道の筆法を受け、その筆蹟はまことに美麗、流水のほとばしる如く高潔でさわやかで新しい。そして見る人をして思わず頭のさがる感を与えるのである。表装は室町期の金蘭、古色の中に燦然と輝く。御忌会には必ず床の間にかけ、わたくしはこの書をじっと拝しているのだ。

ある。そして見れば見るほどいよいよますますこの書は新しく感じられるのである。

わたくしは、いつの間にか本年数え年八十歳になつた。わたくしは今でも暇さえあれば墨絵を画き楽しんでゐる。檀信徒の方々がみえ、墨絵はゆかしい、その良さは解るような気がする、一体鑑賞の焦点はどこにあるのか。と、よく聞かれるのである。わたくしは、そのたびごとに、画は新しさを求めるものである。画に新しさを感ずれば、それでよいのである。真は新なりで、真実なるものは常に新しいのである。四月の大自然も、四月の新学期も、法然上人さまのみ教えも、尊円親王のご真筆も、みな新鮮だから美しい。そして多くの人々に深い感動を与えるのである。新しいものには常に清潔感がある。この新しさこそはわたくしどもの日常生活の生命ではなからうかと思われる。

弁栄上人のお歌の、

日に新あらた日々に新あらたに改まれ弥陀の光に照さるる身は、きつとこの心境を歌われたものとわたくしには思われてならない。



## 私の「青春」

開宗七百五十年慶讃会を偲ぶ

伊藤 現 芳

(浄土宗議会議長)

古稀に近い私の「青春」談義は五十年前の回顧に始まる。半世紀といえば、知恩院第七十九世門主孝養現有大僧正の弟子として祖山の常侍局で起臥し、大勢の兄弟弟子と共に老師に常隨給仕しながら東山中学校（今の東山高校）に通うた頃である。

孝養大僧正は皆様も御存知の通り、明治三十五年五月二日浄土宗管長に就任以来、昭和九年四月十一日、百三歳の高令で正念往生されるまで、実に三十有三年の永きに亘って知恩院に在住され「生仏さま」と崇められた近世の高徳である。

私は東山中学校入学から同校を卒業して大正大学に進学の

ため東都に移るまでの間、乗輿御昇殿の老師に随伴し、朝夕に三百間の鸞張廊下を屢々往復して、御影堂の祖師像を拝した殊勝な記憶や、常侍局の二階で弟坊主達の餓大将となつて相撲をとり、兄弟子に叱られたことなど若い日の追憶は散々ある。だが最も印象に深いのは開宗七百五十年記念慶讃大法要が執り行われた頃の華頂山の活況である。記憶にミスがあるといけないので当時の記録を「知恩院史」から拾って見るとまさしく慶讃法要が営まれたのは、大正十三年三月十日から一週間であったが、三月三日附にて兩陛下より大師前に香華料御下賜の御沙汰を拝して瑞氣華頂の嶺にみなぎる中、

三月十日午後三時壮重なる開扉式が行われ、正しく大法要の幕が切られ、十一日の晨朝法要には九十三歳の老門主親しく御昇殿、日中法要には五百の大衆を率いられ奏楽裡に乘輿にて御昇殿になった。一七日の法要には大殿前に恩賜の舞樂台をしつらえて雅亮会々員によって万才楽、延喜楽等の曲目が演奏奉奏され絢爛たる殿内の法要に対して古雅なる風韻を境内に漂わし法要気分を盛り上げた。又十二、十三、十五、十六の四日間舞樂台に於て奉納された礼讃舞は満都の喝采を博し隨喜渴仰せしめた……

知恩院史の記録は当時の盛況を綴って尽きないが、老門主に随伴してこの盛典に列した若い日の法悦の記憶が五十年後の今日なお私の脳裡に焼付いている。中学校を卒業したばか



早稲田の森に時ならぬ嵐が起り血の雨が降った。私は学友と両手を組み、建学の精神を絶叫しながら、大隈総長の銅像を死守した。喚声<sup>かん</sup>がどよめき、怒号<sup>ど</sup>が校庭にさく裂した。一

りの私、祖師伝の一頁も未だ読んだことのない当時の私にとつて、それは老門主の眼に光る法悦の涙に誘われての感激であつたかも知れない。然し後に大正大学を卒えて社会人となつた私が約半世紀を祖山奉仕に終始して抵抗を感じなかつたのも青春期に受けたこの感激の結果であらうと思う。

× × ×

浄土の教は時機を叩いて行運にあたり

念仏の行は水月を感じて昇降を得たり

法然上人が選択本願念仏集流通章に表現された新宗教提唱に対する確固たる御信念、専修念仏の法幢は今日も高くかけられて、開宗八百年の聖辰が近づく。

## 二本 松 聖 順

(和順会館部長)

瞬<sup>しゆん</sup>、小石がうなりを生じて飛んで来た。運わるく後頭部にあたつて私はこん倒した。逃ぐる者、追う者、なぐり合う者、力<sup>ちから</sup>と力との対決がつづいた。わずか二十分ほどの乱闘だった

が私は流れる血をハンカチでおさえながら文学部の教室へ帰った。飛び交う小石の悪魔のために杏ちようの葉が秋の陽の残照をうけて黄色と無惨に散っていた。

それは早慶戦の入場券割当枚数に端を発し、学生自治会を組織して、その代表を教授会に出席させようということからストライキに突入した事件であった。

私はその頃ロシア文学やドイツ文学に興味を持ち始めていた。コロンタイの小説「赤い恋」は特に印象が深かった。私は次第に社会主義への道を辿ったのである。マルクスやエンゲルスの著書を受読し、発売を禁止された共産党宣言の英訳マニフェストを入手したのもその頃であった。汝の道を歩め、そして人の批評にまかせよ、というのが私の座右の銘であった。

会津八一の日本美術史、坪内逍遙のシェークスピアの講義、津田左右吉の東洋史学などとはある意味で感銘をうけたが、大山郁夫や長谷川如是閑の講義は必ず出席した。築地の小劇場にもよく通った。しかし、ある日、中桐確太郎教授の紹介で一灯園の西田天香が大隈講堂で講演をし、門弟たちと共に黙々と校庭の清掃に奉仕している敬虔な姿をみた時、私の心に大きな変化が起った。それはわが心情の思いもよらぬ不思議な転回であった。天香の懺悔の生活を始めとして色々な宗

教書を読みあさるようになった。バイヤンの天路歷程にひきつけられ、武蔵野の霜夜の草にひれ伏して涙したのもその頃であった。小石川の興学舎に光明会の田中木又師を訪ねて念仏の道を問うたこともあった。そして同志を集めて仏教青年会の結成に力を注ぐようになった。

フイヒテは懷疑知識信仰という本を書いている。しかし私の道程は感激懷疑信仰であった。私は不知火の点滅する有明海に近い一寒村に生れ、旧制中学を卒業した十九歳の春、菩提寺で開かれた講習会の時、熊野宗純師の法身論の講義をきき、念仏信仰の哲学的背景に心の躍動を覚え、裏山に登って菜の花と蓮華草の咲き乱れた平野の彼方に展開する有明の海に昇る太陽にむかって合掌念仏した感激が私の青春時代の心の隅に残っていたのであろう。しかし感激は淡い一片の花びらにすぎず、信仰の深淵に徹せぬままに忘れられ、学生生活での信仰への知識が却って懷疑をはらみ、苦悩の世界に動転するばかりであった。

しかし偶然にもよき人との出会いと潜在的に心の中に焼け残った感激が懷疑を越えて信仰への道しるべとなりわが青春の危機を救ってくれたのである。卒業して増上寺に入り、三年後には北九州の煙の街で伝道への苦練の道を歩むことになった。

# 「わが青春」



野上 幸

(浄土宗寺院婦人会常任理事)

私の生れたのは、静岡の宝台院という寺です。生後満三歳の時母を亡くしたので、それから父ひとりの手で育てられました。

父は野上運外と云って、昭和の初期から浄土宗政の色々の仕事をした人で、御存知の方も多いと思います。

父は慈父の一面に非常に優しい人で、優しい時は、髪もとかしてくれたり、呉服屋へも一緒に出かけて衣服の見立てもしてくるし、何んでも打ちあけられて相談にのってくれる反面、叱る時は棒や掃除道具ではげしくたたかれる事が度々ありました。

しかも念仏信仰の極致に達した人で、父の師匠は野上運海大僧正で、知恩院門跡を山下現上人にゆづり引退された後、京都上善寺で晩年を送られた方です。当時一日三万遍のお念仏を誓ってなさったという事です。父もその側近に仕えて、その信仰生活もほんとうに筋金入りでした。一週間の大部分は東京や京都で宗政の用事に追われていても帰山し

て毎週土曜日の夜はかならず念仏会を開いて、別事念仏の後、法話又は講義を聴かせてくれました。聴衆は五、六名乃至二十名位迄でしたが、かかさず開いていました。

こんな風に育って青春期を迎えた私は、学校を卒業すると、すぐ尊敬していた九条武子夫人の著書無憂華(アソカ)という本から名を載りて、アソカ会という女子青年会を作りました。毎週の別時念仏会、月一回の講演会、年一回の旅行等を行いました。その頃の講師は藤井実応先生(大樹寺貫主)や友松円諦先生(神田寺主管)で清水鈴与商店の仏教青年会の方々と御一緒に会等開きます。アソカ会は明るい楽しい会でした。その他コーラスをしたり、和歌を習ったり充実した毎日でした。この人達は成長し結婚してよい家庭夫人になって、私が静岡県の仏教婦人会の設立につとめた時、県下各地の支部員としてよく協力してくれました。

私には宗人という兄がありました。これも瓜生四恩会という会に入って、毎日曜日には東京都内のセツツルメントを手

伝ったり、静岡へかえれば静岡の華陽院さんの日曜学校を手伝ったりしていました。この兄はヴァイオリンを引いたり、合唱の指導をしたり、明るい反面、貧しい人や病める人に対しての、實際的に社会活動につとめていましたので、私にも物に対する感謝の念とか、寺の生活のほんとうのあり方等をよく語ってくれました。

そして、大正大学卒業直前に腸チブスにかかって亡くなりましたので、私ははじめて内親の死に直面して信仰のあつかった父の直接的な指導をうけるよい機会となり、それから後は積極的に各地の別時念仏会に出かける様になりました。京都の藤堂祐範上人夫妻には非常にお世話になりました。殊に庫



法縁の関係で伝通院から大学に通わせてもらったのが昭和の初期で正大創立の当初であった。山内の生活は中々酷かった。四季を通じて起床は四時、まだ暗い中を野沢俊岡僧正を中心に朝の勤行が行われた。三部経の輪読、長い念仏、一時

子夫人は吾児の如く可愛がって下さって、現在光明会で講師として御活躍の藤堂俊章上人、仏大の恭俊上人御兄弟の少年、青年時代には御一緒に青年光明会の末席に座らせて戴いたものでした。

表題のため、私が青春時代をかえりみて、ただ一途に過した様でしたが、幼稚園三ヶ園を生み各地に仏婦を育て来た現在に到る迄、自分が歩いた道は青春らしい華やかな恋物語はなかったのですけど、念仏信仰の小さな求道者としての道を歩いた事だけはほこりにしてもよいと思っています。

私は息子にも嫁にも、本を読む事、念仏を称える事をすすめています。それが私の彼等へのこす唯一の遺言です。

## 伝通会館の思い出

吉川 哲雄

(大本山光明寺執事長)

間半は有にかかった。早く終りたくて木魚の早打ちをすると思僧正の叱声が飛んだ。眠い、寒い、つらいなあと思う毎朝であったが、今になって考えると真に有難い修行の場であった。この経験が今日の私にどんなに生かされているかわからない。

昭和四年の秋だったと思う。伝通会館が開館された。これは当時の仏教界にとって画期的なことであった。関東大震災（本年は満五十周年）前まで伝通院電停協に昌林院という寺があった。震災を被って焼失し、これが復興を伝通院で行うことになった。当時の執事木村玄俊上人（後の伝通院貫主）は交通至便の場所へ法要、葬儀だけを執行する為の伽藍を建てるより念仏弘通の教化施設を建立することを発願された。寺へ人の集ってくることを待って居た当時としてはこれは随分と思いつたことであった。いわゆる寺院の街頭進出である。然しこの時代即応の企画もこれを実現する為には莫大な費用を必要とし、資金の調達に木村上人の苦勞は容易なものではなかった。東奔西走の結果檀家の西野家から全額支出してもらうことに成功した。当時の金で三十万とか五十万とか、今の金に換算すれば恐らく億という単位であろう。これは同上人の政治的手腕というよりも、上人の教化力がこの篤信者を動かしたものだといえよう。

教化活動の中心は人である。先ず当時宗門に於ける児童教化の第一人者であった鈴木積善氏を主事に迎え、その下で正大を出たての浜野義光、浜野正真それに私が走り使いの役をおおせつかった。その活動は実に多角的に行われた。児童教化、青年活動、仏教講座、芸術運動、文書伝道当時の仏教界

としては括月に値するものであった。招聘された講師陣には正大の矢吹、渡辺、椎尾、望月等の諸博士は勿論仏教界の權威はほとんど網羅され、高楠順次郎、長井真琴、常盤大定、小野清一郎等の諸先生のほか、その他河口慧海、金田一京助、三木清先生等の特殊の顔ぶれもあった。それらの講演を機関誌「伝通」に記載する為の速記をとるのが私の役であった。正式の速記術の練習もしていないのでただ無我夢中で鉛筆を走らせ、終った時頭に血がのぼってぼうっとしたことも何回もあった。最も速記のとりにくかったのが渡辺海旭先生、とり易かったのが大野法道先生であったように記憶している。

又特に仏教音楽の先鞭ともいふべきバドマ合唱団は作曲指揮者弘田竜太郎、作詩松浦一先生によって帝都の音楽界に脚光を浴びた。ページの関係でその他の活動について詳細記することは出来ないが何しろ希望に明け、仕事に暮れた毎日であった。

こういった多彩な仏教会館としての教化活動も、大東亜戦の勃発と共にだんだん窮屈となり帝都爆撃、終戦と共にその機能が失われ今日に至ったことはいかにも残念である。



第十四回「浄土文化講座」より

# 法然上人と私

大正大学教授 竹 中 信 常

本日は、「法然上人と私」という極めて大きな  
題を頂きましていささか恐縮している次第なので  
すが、少し変った角度からお話を進めてみたいと  
思います。

私の父は、昭和二十四年十二月二十日に八十歳  
で亡くなったのですが、「お釈迦様も法然上人も  
八十歳で亡くなられたのだから、俺も八十歳で死  
ぬんだ」というのが常日頃の念願でありまして、  
そうした誠に素朴な思いから暮れの十二月、数え  
年八十歳ギリギリのところで正念往生を遂げたわ  
けです。しかも、その死の最後まで非常によくお  
念仏を唱えていました。ともかく老僧は、明けて  
も暮れても念仏三昧というわけでありました。私

共は寺でありまして毎朝勤行をするわけですが、  
私が学生の頃は、私が起るまでは父は念仏をして  
絶対に止めません。まだ若かったものですから、  
もう少し寝ていたいと思っても仲々止めてくれま  
せん。とうとう根負けして起きて行くというよう  
なわけで、いつてみれば、目覚しの念仏であつた  
わけです。しかし、老僧の念仏は、学問もなけれ  
ば知識もなく、ただ理屈なしに文句もなくお念仏  
を唱えていたように思います。私自身、父親から  
知識学問の話は一遍も聞いたことがありませんか  
ら、恐らくそうであつたにちがひありません。

戦争中、老僧は福島県会津の山寺に疎開してい  
たわけですが、月に一度程私が見舞いに行きます

と、村を出はずれた遠くの方から木魚の音に乗せて念仏の声が聞えたものです。行ってみますと、本堂に一人正座して念仏を唱えておりました。その時しみじみと感じましたことは、念仏というのは仏様と向き合ってたただひたすらに孤独を乗り越えて唱えることなのではないか、と思っただけです。

よくお遍路さんの編み笠に「同行二人」ということが書いてあります。これは一人でも仏と二人連れであるということの意味するわけですが、老僧の念仏も正に同行二人の念仏であったようです。念仏を唱えて三昧の境地に入る、そういった念仏の姿が老僧の背後から浮び上って来るようにも思われるのです。

さて、これは有名なお話ですが、時宗を開かれた一遍上人もお念仏を非常に唱えられた方ですが、ある時師に対して自分の信仰の深まりを一つの歌に託されました。

「となうれば仏もわれもなかりけり

南無阿弥陀仏の声ばかりして」

しかし、師はまだ声が残っているとお諭しにな

られ、一遍上人は再び念仏に励まれました。その結果、もう一つの歌を詠まれて、師に奏上されました。

「となうれば仏もわれもなかりけり

南無阿弥陀仏なむあみだ仏」

唱えている人間もなければ声もなく、ただ南無阿弥陀仏だけがある。これが真実の念仏の三昧の境地である、と一遍上人は申されるわけです。

大体、念仏というのは何の為に唱えるのか。いうまでもなく、自分が西方極楽浄土に往生する、この手掛りとしての念仏であるのです。自分が往生するわけで、他人の往生の為に念仏するわけではないのです。法然上人のお弟子の親鸞上人の有名な言葉に、

「浄土の慈悲というは、念仏して、いそぎ仏になりて、大慈悲心をもて、おもうがごとく、衆生を利益するをいうべきなり」

というのがございます。これは、浄土の教えでいう衆生済度の憐みは念仏してまず自分が大急ぎで仏になってその上ではじめて大勢の人を救うのである、ということです。真宗と浄土宗の教義は

若干違っておりまして、そこに難かしい問題もありますが、そういうことは別と致しまして、ともかく、自分がまず「いそぎ仏になって」という姿勢は、私の老僧が十二月二十日、八十歳のギリギリのところで急ぎ仏となった念仏の唱え方と同じものではなかったかと思うわけです。

つまるところ、念仏というものは自分自身が救われる、自分自身が悟るということにその第一歩があるわけで、その後で大勢の人の為に教え説く行為が来るもので、これが大乘仏教の本来の姿なのでしょう。結局、信仰というものの根本は孤独なのです。あくまでも、自分自身が自分の力で自分だけの為にする孤独な仕事といっても差し仕えないでしょう。そこで先程申しましたように、仏と私という「同行二人」ということが浮ぶわけで、形の上では自分一人でも常に仏と差し向いになって、念仏の場合で申せば、阿弥陀如来と差し向いになって誰の為でもない自分の往生極楽の為に念仏を唱えるわけです。この私を救う為に仏はあのです。やはり親鸞上人の言葉に、

「聖人のつねのおおせには、弥陀の五劫思惟

の願を、よくよく案ずれば、ひとえに親鸞一人がためなりけり」

とあります。阿弥陀様は衆生を救う為に非常に長い間の御苦勞をされ、そして四十八願の願い事を果されたわけですが、この仏様のお慈悲はひとえに親鸞一人の為である、と申されているのです。隣りの人でもなく、脇の人でもなく、ただただ今差し向いになっている自分の為に阿弥陀様が御苦勞されているというわけです。親鸞上人の言葉の中にはこういうものもあります。

「親鸞は、父母の孝養のためとて、一遍にても念仏もうしたること、いまだそうらわず」

私は父や母に孝行する為に、即ち自分以外の人の為に念仏を唱えたことはいまだに一度もない、すべて自分だけの為の念仏であるというように、非常に強い言葉で述べられています。これが信仰の極地というか、一番のポイントなのではないでしょうか。このことは色々と問題がありまして、私共が亡くなった人の追善回向の為に念仏を唱えるなどというのをよくやりますが、ところが親鸞にとつては念仏はあくまでも自分の為にだけあ

るわけで、もともと孤独の念仏であつたものが何時頃から追善回向の念仏に変わったかなどということとはまた別の問題であります。ともかく、そういうところに念仏の本義があつたのではないのでしょうか。

ここで、親鸞上人は法然上人の念仏を受け取つて浄土真宗という一宗を確立した人で、いわば法然上人とは師弟関係にあるわけですが、信仰の世界における師と弟子の連がりこそ極めて深いものでありまして、これも有名な親鸞の言葉ですが、

「よきひとのおおせこうぶりて信するほかに別の子細なきなり」

とあります。よき人というのは師の法然上人のことですが、そのよき人がこう仰言つた、これを信するのだ、それ以外に理屈はない——とにかく師がこういわれたから信じてそれを行なうだけなのだ、というわけです。そしてまた、親鸞上人は次のようにいわれるのです。

「念仏はまことに、浄土に生まるる因にてはべるらん。また、地獄に墮つべき業にてはべるらん。総じて以て存ぜざるなり」

念仏を唱えることは、極楽に生まれる種を播くことかもしれないし、また逆に地獄に墮ちるかもしれない。しかし、「よきひとのおおせをこうぶりて」信じているのだから、そういうことは一切構わない。とにかく、師を信じてひたすらに念仏を唱える、こういう念仏の受け取り方なのです。親鸞上人は極めて優れた偉大な人ですが、この稀にみる親鸞をして、「よきひとの……」といわしめた法然上人の偉大さも大いに認めざるを得ないのではないのでしょうか。法然上人なくしては、恐らく親鸞上人のあの教団というものも存在しなかつたわけでしょう。

話は一転しますが、先程述べましたように、信仰というものはどこまでも孤独であるということです。自分の心で、自分の口で、仏を念じ、仏を唱える全く代理の効かないものが信仰の在り方なのです。懲りずに親鸞の言葉をまた引きます。

「一人で寂しい時には、二人と思え。二人で寂しい時には、三人と思え。その三人目が親鸞これなり」

何でもない言葉ですが極めて味わいの深いもの

です。人間というものは一人だけでは誠に寂しいものです。この時に、お遍路さんと同じように仏様と一緒にいると思えば寂しさも柔らぎます。ところが、それでもなお寂しい時には、及ばずながらこの親鸞が念仏を唱える人を見守りましょう、というような意味合いです。このように人間というものは、一人で切り離されて生きられるものではありません。

古来から、偉大なる宗教者は深山幽谷に入って孤独な修行をしています。お釈迦様もしかり、マホメットもしかり、イニス・キリストにしても洗礼後の四十日間をヨルダルの川べりに一人過しています。あらゆる宗教家が最初になすことです。このことは、形の上で孤独になって、自分というものを切り離してはじめて自分だけでは生きられないものではないということを悟るというわけです。ここに、遁世、隠世の基本的な意味があるのです。いわば、頭で考えるのではなく肌で感じる孤独というものは、やはり自分で体験しなければならぬわけです。結局、信仰の世界においては、常に仏と共にあるのだという自覚なくしては

決して成り立つものではないと思います。

再び老僧を持ち出しますが、老僧の唱えた念仏も、阿弥陀様、法然上人と向き合いの念仏ではなかったかと思うわけです。私共の唱える念仏というものも、誰の為でもない自分の往生極楽の為の念仏でなくてはならないわけです。従って、宗祖法然上人も既に八百年前にお生まれになり亡くなられた歴史的なお人柄ではありますが、しかし、念仏を唱える人にとっては、その一人一人の為に心の中に生き続けておられるのではないかと思うのです。浄土宗でも開宗八百年を間近に控えて、一宗を挙げての記念事業を色々行なうわけですが、念仏者にとっては八百年という時の流れはもはや何の意味も持たないと思われれます。念仏することの中に八百年の時間というものが一瞬に縮まって、眼前に法然上人が在られるのであると感ぜられます。信仰の世界にこそ仏との対話が必要なのではないのでしょうか。仏と私とが一つになって、声さえも残らないで、ただ南無阿弥陀仏とお念仏を唱えるだけなのです。



## 晩年の法然上人

岩井信道

(京都市伏見区阿弥陀寺住職)

法然上人の愛弟子、住蓮安樂の二人が、御所の女官鈴虫松虫を無断で出家せしめた事が直接の原因となり、加えて念仏の教があまりにも民衆の間にひろまって行くのに、大きいねたみの心を持った旧仏教の一部の人達による迫害によって、住蓮安樂は死罪の極刑、その罪は師匠にもあるとして、法然上人その他高足の弟子達が各地へ流罪に処せられたのであります。

この時法然上人は、瀬戸内海塩飽諸島の本島の地頭高科保遠入道西忍の館と讃岐小松の庄生福寺に約十ヶ月すごされたのでありますがその後は少し許されて、まだ京の都へは帰ることは出来ませんが、摂津の国箕面の山中深き勝尾寺の二階堂に約四年間おすまいになりました。

この勝尾寺は、真言宗の名刹で西国三十三番の観音靈場の札所にもなっているので有名であります。今でも可成り便利の悪い所です。大阪梅田より阪急電鉄宝塚線にて石橋で箕面行に乗り替え、終点よりはハイヤーか、徒歩なれば約二時間の行程で人家を遠くはなれた幽邃の地にあります。最近では万国博覧会の事業の一つとして国鉄茨木駅より、車で約四十分、途中溪谷の美を觀賞しながら門前まで行く事が出来る様になりました。

四国御流罪の間は、各地を歩かれて弘法大師の遺跡をおたずねになったり、また時には松山の観桜会におでましになった等の事が御伝記にかかれてありますが、この勝尾寺にお移りになってからは、お歳もだんだんと八十

に近くなられ、亦人里遠くはなれていますので、あまりたずねて来る人もなく、亦自ら山を降りて人に接しられる事も少なく、唯あけくれ峯の松にかかる白雲をながめて、念仏三昧の御日常であつたことでしょう。

「柴の戸にあけくれかかる白雲をいつむらさきの雲にみなさん」

と御うたいになりましたその通りの御心境でありましたでしょう。

それでも勅修御伝には、信空・聖覚等の御弟子達、亦宇都宮三郎頼綱等が、ここに晩年の上人をたずねて入信をしていることが記されています。

また勝尾寺の住僧達の衣があまり粗末であつたので、それを十五着も新調して施入したり、ある時には都に持っておられた一切経を取り寄せて、この寺に寄進をされています。その時の解題説法をされたのが上人の御弟子聖覚法印でありました。

この様に淋しいながらもおだやかな日常の御生活の御姿には、もう御年八十歳に近き御上人がこの所を最後の地と思い定めて、唯ひたすらお念仏の中に仏の御来迎をお待ちになったことがうかがわれるのであります。

ところが上人七十九歳の御時、御鳥羽上皇たびたびの

御夢見などありてひそかに、法然上人を流罪に処した事を後悔して居られましたが、遂に同年の十一月十七日に藤中納言光親卿を使として、流罪を許されて都に帰られる様に宣下がありました。

今は京都から勝尾寺まで自動車で一時間半程ですが、その当時はどうしても一日はかかります。法然上人がこのことをお聞きになりましたのは、いくら早くてもその翌日、十八日ということになります。これをおききになりました上人は、一体どの様でありましたでしょう。

今の今まで、この山の中が自分の往生の地と定め、都の空をはるかに望みながらも、再びその土を踏むことは夢にも思わなかつたのに、さて許されてみると、三年余りもすみなれたこの地をわずか一日、二日の御仕度で同月二十日には早くも、まだ充分にお住いになる所もない都へおかえりになったのであります。この所を勅修御伝には、

「十一月十七日、彼卿の奉行として、花洛に還帰あるべきよし、鳥頭変毛の宣下をかうふり給ぬ。則同廿日上人帰洛し給いければ、一山徳をしたひ、満寺なごりをおしみて、万仞の霞よりいでて、九重の雲にぞおくりたてまつる。」

と美文をもって記されています。

ともすればこうした御伝記等には、上人を仏様が雲の上の人の様に取扱っているのではありませんが、その美しい文章の裏に、私は法然上人の何とも言えない人間味、やはり私達と同じ人間であらせられたということを感じさせて頂くのであります。

私の父が七年前七十九歳の高齢でなくなりましたが、その時二、三ヶ月病床でやすんでおります間に、あれはまだかこれはこないかと言って、しきりに人に会いたがりました。上人もやはり、あきらめていた京の都であっても許されてみると、一日でも早く見たい、なつかしい弟子や、信者の人達にも会いたい、そしてお念仏の法も説いてあげたいという老の一徹の心が、こうしたあわただしい御帰還の姿となったのではないのでしょうか。

唯今の知恩院の隣り栗田の青蓮院の慈鎮和尚の好意により、その護摩堂を借りてともかくも落着かれ、越えて建暦二年正月二日より御発病、長年のお疲れが出たのか、弟子達に会う事の出来て安心されたのか、二十三日は御遺言の一枚起請文を残され、こえて二十五日には早くも御歳八十歳をもって大往生を遂げられたのであります。

## 表紙の解説

### 宇治平等院（鳳凰堂）

「極楽うたがわしくは宇治の御寺をうやまえ」と、藤原時代の童謡にうたわれている当院は、その優雅な構築様式から、訪れる人々に、この世に極楽浄土を具現したかのような感銘を与えてくれる。当院は「源氏物語」の主人公光源氏のモデルとされる右大臣源融が平安初期に別荘を建立したことに始まる。その後陽成天皇が行宮を営み宇治院と称したり、宇多・朱雀天皇が離宮として、また、長徳四年藤原道長が山荘として造営したりした。そしてその山荘をゆずりうけた道長の子頼道が、永承七年、山荘を喜捨し本堂を建立天台宗侶明尊を開山として迎え、寺院としての基盤ができたのである。翌天喜元年に阿弥陀堂（現鳳凰堂）を建立し、その後藤原氏的全盛時代とあいまって、各堂塔伽藍がととのい宏壮華麗な大寺院となったのであるが、治承四年源頼政が当院で平氏と戦い、建武三年には楠正成の手勢が放った兵火で堂宇の大半を焼失、つづいて元龜の兵火で鐘楼・釣殿・鳳凰堂を残し焼失してしまったのである。なお明尊以来天台宗三井円満院門跡が兼務していたが、明応年間浄土宗の栄久が本院の荒廃をなげき、修復してのち、天台（最勝院）浄土（浄土院）両宗の所属となっていた。

# 一紙小消息

〈1〉



〈三重県四日市観音寺住職〉

岸 覚 勇

は し が き

一紙小消息とは元祖法然上人の御法語であって、和語燈錄第四に「黒田の聖人へつかはす御文」として挙げ、また勅修御伝第二十一にもこの文を載せ「此書世間に流布す、上人の小消息といへるこれなり」と云っている。

この消息は彼一枚起請文が總轄的に浄土宗の信仰の肝要を述べたるに對し、きめこまかに浄土宗の安心起行の趣きを説かれている。

されば故椎尾弁匡大僧正も晩年特にこの小消息を、浄土宗信仰の要諦を示すものとして、推奨せられていた。

さて元祖上人がこの消息を送られたという黒田の聖人とは

何人であらうか、遠く徳川時代の義山上人（一六四八—一七一七）は、和語燈錄日講私記に「伊賀国名張に住む人」と云い、故伊藤藤祐晃師は浄土宗史の研究に、伊賀黒田庄は東大寺の寺領の莊園であるから、黒田の聖人とは東大寺の大勸進たりし俊乗房重源であらうと推考せられ、また近時三田全信博士は浄土宗史の新研究に、宗門内外の資料によって、黒田の聖人とは俊乗房重源の弟子であり、また法然上人の備弟子でもあった行賢大徳であらうと推定せられている。

かくの如く、この小息を預かれた人については、學者によつて説が分かれているが、小消息そのものは浄土宗の安心起行を示す肝要の御文であることに相違ないから、以下本文について解説してみたい。

## 本文

### (一) 末代の衆生を往生極楽の機にあてて見るに

「末代」とは末法の義で、仏教には正像末の三時説があり、釈尊の滅後五百年を正法の時代とし、この時は教行証の三が備わり、釈尊の説かれた教があり、その教によって修行する人があり、またその修行によって悟りを開く人もあるという最上の時代。次にその後の一千年を像法の時代とし、この時は釈尊の教があり、その教を修行する人もあるが、悟りを開く人はないという次善の時代。終にその後の一万年を末法の時代として、釈尊の教は残るも修行する人もなく、悟りを開く人もないという濁悪の時代というのである。

いまここで末代というのは、この正像末三時の中の末法の時代を指す。されば末代の衆生とは、末法の時代に生れたる人人という意である。

「往生極楽」とは、往生とは往いて生れるの義、極楽とは阿弥陀経に此れより西方十万億の仏土を過ぎて世界あり、名けて極楽という如く、この娑婆世界より西方十万億の彼方にある極楽世界へ往いて生れることである。

近時学者の中には、往生を此の世のこととし、精神更生と

か、進歩向上の義と解する人もあるが、元祖上人の云われる往生は、文字通りこの娑婆を捨てて極楽世界へ往いて生れるの義である。

そのことは元祖上人の往生要集に「往生とは草庵に目を瞑ぐの間、蓮台に臥を結ぶの程、即ち弥陀仏の後に従つて菩薩衆の中に在り、一念の頃に西方極楽世界に往生するが故に、往生と云うなり」と解釈していられることによって明瞭である。

### (二) 行すくなしとても疑うべからず、一念十念に足りぬべし

とは、念仏を唱る行が少くても往生は出来まいと疑つてはならぬ。なぜなれば第十八願の願文には乃至十念とあり、また願成就文の文には乃至一念とあるから、十念一念でも往生は出来るのである。

然しここに注意すべきは、一念十念でも往生が出来るというのは、臨終に至つて初めて念仏を唱えたという臨終の機の人たちのことであつて、平生より信仰に入つた人たちが、平生に一念十念唱えておけば何十年後に死んでも、その平生の一念十念で往生が出来るというのでは、ないということである。

そのことは法然上人が念仏往生要義抄に「一声十声と申す事は最後の時の事なり、死する時一声申すものも往生す、十声申すものも往生すという事なり」と云われていることよって明らかである。

(三) 罪人なりとても疑ふべからず、罪根深きをも嫌はじとの給へり

とは、自分が罪人であっても、往生出来ぬと疑ってはならぬ。なぜなれば善導大師は散善義に「自身は現に是れ罪惡生死の凡夫なり」と宣い、また後善導と云われた法照禪師も五会法事讃に「彼の仏因中に弘誓を立て……破戒と罪根の深きを簡ばず」と云われているからである。

(四) 時くだりとても疑うべから、法滅以後の衆生なほもて往生すべし、況んや近來をや

とは、現在は既に正像末の三時の末法の時代であるから、往生は出来ぬと疑ってはならぬ。なぜなれば無量壽經には「当來の世經道滅盡せんに、我れ慈悲哀愍を以て、特に此の經を留めて止住百歳ならん」と、末法万年が過んだあとで

も、猶百年は念仏往生を説く無量壽經を留むと説かれているし、また慈恩大師も「末法万年余經悉滅、弥陀一教利物備増」と云われているからである。

されば念仏往生のみのりは、末法万年の過ぎた後までも残るというのである。然るに今はまだ末法に入つて間もない時であるから、念仏往生が出来るのは当然である。

(四) 我身わろしとても疑ふべからず、自身はこれ煩惱是足せる凡夫なりとの給へり

とは、わが身を振り返つてみて、わるい即ち念仏は申しながらも煩惱妄念は止まぬとか、厭離穢土欣求淨土の心が緩慢にしか起らぬとか、昨日は心勇んで念仏も盛んに唱えられたが、今日は心進まず退転してしまつたとかというようなことがあつても、往生は出来ぬと疑ってはならぬ。

善導大師も往生礼讃に「自身は是れ具足煩惱の凡夫なり」と仰言つていられる。後年第三祖記主禪師は決答疑問鈔に、かかる疑を起行の疑心と云つて、往生の妨げにはならぬとせられていられるからである。



## 異僧「眞覺」

第四回

柴田 六五郎

(滋賀県近江八幡市在住)

秋の彼岸が過ぎて稲刈りが始まると、彼は家の者が驚く程手伝いに精を出した。彼の独り決めではあったが、此の家を出るということ、つまりおちまの白い眼から解放されるという希望が彼を力づけたのだ。

「清八よ。今年はえらいきばるやないか」

そう言つて治兵衛は褒めた。

「ほんまに。もう一人前や」

おちまが傍から合い槌をうった。何を言われても彼は相変らずの無表情であつた。おちまの言葉は、褒め言葉ともとれるし、——もう一人前やから、お前は自分で自分の分別をつけよ——そうも聞こえる言葉である。然し彼は、そこまでは考え及ばなかった。ただ秘かに立てた計画（それは誰にも知られてはならない秘密であつた）を覗かれぬための要心であつた。とりわけそれはおちまに知られてはならない事のように

に思われた。

早稲、中稲と刈り終つて、漸く晩稲にかからうとする頃であつた。その日はおちまも他の子供達も早仕舞にして、田には治兵衛と彼の二人切りであつた。田の畔に腰をおろした治兵衛は、煙管の鞘をスポンと音を立てて抜きながら、

「清八よ」

と呼んだ。

彼は左の掌に一杯になった稲束を其処におくと、黙つて治兵衛の側に腰をおろした。

「清八」

とまた治兵衛は彼に呼びかけた。穏やかな、むしろ温いものさへ感じられる治兵衛の呼びかけであつた。治兵衛は鼻から白い煙を二本「フーツ」と吐き出すと言つた。

「清八よ。お前も来年はもう十五や。そろそろ何とか考え

んならん」

清八はギクリとして治兵衛の顔を見上げた。誰にも洩らしたことのない心の秘密を、治兵衛はチャント知っているではないか。治兵衛は治兵衛で、五日前、子供等の寝息を伺いながらおちまと言いつつ事を胸の中で反芻していた。

「あの子も年が明けると十五や。もう一人前でっせ。そろそろ丁稚など何なとにやる算段せんとおきまへんで」

そう言い出したのはおちまの方である。彼女の考えをうすうす感づいてはいたが、治兵衛は、清八が哀れで、今日迄一向気付かぬ風を粧つて来た。が、こう面と向つて切り出されると、「ああ、やっぱり」と、ため息をついた。

「彼奴にはおさんをめあわすちうてたやないか。成る程一寸鈍な奴やが、別にこれちう悪い処もないし。智慧も遅れとるが万更の阿呆でもなし……」

「あきまへん。あんなのろまの才覚無しは。分家なんと思おもよらんこっちゃ」

治兵衛に皆まで言わせずビシヤリと言つたおちまは挺でも動くものかという姿勢である。

「それでも、初めにそう言い出したのはお前やないけ」  
無駄とは知りつつ治兵衛は反論したが、

「貰うた時は、あんな鈍くさい人間になろうとは思わなん

だ。清次良さんも貧乏はしてても中々のしつかり者やし、その子やからと思うてたがまるで当て外れや。おさんの舞なんて頼まれてもこっちゃから願ひ下げや。そんな事してみなはれ、わし等村中の笑われもんでっせ。此の頃飯食う時ヒョット茶碗の中からわたしを睨んどるその目付。阿呆のくせに中々執念ぶかいとてがおす。気味の悪い子や。来年といわず、明日にでも何処かへやつてしまいたい位や」

取りつく暇もなかった。といって無造作に放り出す訳にもいかぬ。何とか彼に相応しい職がらを考えてやらねばならぬ。今こうして清八の顔を見ると、あの晩のおちまの激しい言葉がまた治兵衛の耳の奥に響いた。

「清八よ」

と又彼は言った。

「お前。坊さんにならんか？」

清八はキョトンとした顔を治兵衛に向けた。

「坊さんて！ お寺の坊さんどすか？」

寺の和尚と云うのは賢くて、その上永い修行をしてやっとなれるもので、自分のような鈍な人間が望むことすら出来ぬものと思ひ込んでいた清八は、治兵衛の顔を見上げながら、

「わしは丁稚に行きたい」

と言おうとしてモゾモゾと尻を動かした。

「実わな、わしや昨日旦那寺の万福寺へ行って御院主さんに頼んでみたんや」

治兵衛は頓着せずに言葉をつづけた。

「お前を小僧に置いて貰うように頼んだ、処が……『真宗は、あんたも知っての通り世襲で、うちには息子も居るこっちゃから小僧は要らん。けど、そういう訳なら預ってもよい。一たん預ってその上で、禪宗なり浄土なり小僧の要る寺へ世話してやろう』……そういうこっちゃった」

清八は慌てた。そして少し吃りながら、

「お父っつあん。わしは丁稚になりとうおすのや」

と声を喉につまらせて言った。

「ふん」

と、治兵衛は一寸考える風で

「そりやまあ丁稚に行ってもええが、丁稚というのは商売の見習いや。商売人ちうのは、人の何倍もかしこうて目先がきかんとあかん。お前にはちよつと無理やな」

治兵衛に対しては何の含むところも無い彼には、その言葉が素直に受けとれた。然し坊さんになる事もまた大変なことに思われて、

「それでもお父っつあん。お坊さんになるにはきばって勉強せんならんやろ」

新福寺の和尚の顔がチラッと脳裏をかすめた。

「うん勉強せんならん。そやけど学問ばっかりしてござる坊さんもあれば、お経ばかりあげてる坊さんもある。〃法おっ」と言うて国中を歩いてる坊さんもあれば仏様を彫ったり絵をかくてる坊さんもある。俺も此の間説教で聞いたんじやが、良寛さんというて年中子供と遊んでる坊様もあるそう。まあいろいろじゃ。お前も自分の性に合うた坊さんになつたらよからう」

坊さんの在り方がそんなに色々あるとは思ひもよらなかつた彼は治兵衛の話に驚いた。しかし自分にはどれ一つとして出来そうなのは無い。

「お父っつあん。掃除ばかりしてる坊様もあるのか？」

掃除ならば出来そうだと考えた彼は尋ねた。

「ああ。あるともあるとも掃除ばかりしてる偉い坊様もある」

一点のあかりが彼の心の隅にともった。

「まあよう考えとけ。何も今決めんなることやないで」

彼の表情を素早く読みとった治兵衛は、すっかり冷えた番茶の残りをゴクッと飲み干すと、

「さあ。もうひときばりしようかい」

ゆっくり立ち上って、尻の土を左手でポンポンとはたいた。

梧葉のさと



苦難のおしえ

三田全信

一 桐の葉

「階前の梧葉すでに秋声をつぐ」という言葉があるが、梧桐（きり）の葉は、真夏にいきいきした葉でも、ぼろりと落ちる。だから桐の葉が落ちはじめたら秋のしらせだというのである。われわれは若くていきいきしてる時に、死というものが必ず来るということを考えて行動しなければならぬという、いましめである。健康な時は死を考えるなどは縁起が悪いしそんなことは口にして欲しくないという。そのような説教は止めて欲しいと仏教といえは死を連想したり、僧侶といえは塩を振

りかけたりする人さえある。しかしいくら嫌がったりきらったりしても来るものは必ずやって来る。それならば生れた以上死というものをもっと真面目に取組んで考えるべきである。桐の葉が一葉ボトリと落ちてても敏感にさとらねばならないのではないか。浄土宗の第二祖鎮西上人（聖光房弁阿弁長）が、小僧の時お寺で法要があつて師匠から櫛（しきみ）の葉を採つて来るようにいつけられた。ところが櫛の木が高くて容易に葉がとれない。よじ登つてとるより方法がなかった。仕方がないから白衣の裾を帯にはさんで木登りをしてやっと目的の葉をとつた。この時この小僧さんが子供心にふと気付いた。「学問の道もこの通りだ」と。苦心艱難をしなければ、得る

べきものは得られないのだ。後に浄土宗の第二祖となれるほどの人だけあって少年にしてすでにさとられ、学業を励まれたのである。のち九州からはるばる比叡山のぼり、二十九歳の時には郷里油山の学頭になられたというから、今でいえば大学の学長にあたると思う。人望もあり、帰依の信者も集って自坊明星寺に五重の塔を建てることになった。ところが或時弟の三明房に会われたのであるが、久方振りの話にあれもこれもとお互に胸を開いて懐しい思いで話をされている最中、三明房が突然顔面蒼白となり昏倒して午後四時から翌朝の九時まで意識不明になられた。鎮西上人の驚はいうまでもなく、朝九時頃になって意識が回復して安堵の胸をなでられたのであったが上人の脳裏に焼きついたものが一つあった。それは「死」ということである。死の前には学長という名譽も塔という立派な建物もすべて無に等しい。今までの学問は直接に死の解決を教える学問ではない。今の仏教は理論の学である。上人は幾度か反問しながら出来上った塔の仏像を注文するため京都へ上られた。寺町綾小路の仏師康慶の宅（今聖光寺）に宿泊して塔仏が出来上るのを待っておられた。毎日怠惰なので町見物に出かけ、町の噂に法然上人の教のことを聞かれた。そしてハッと

死の解決は法然上人に聞けばわかると吉水の庵室をたづねられたのが午後二時過ぎ、上人との話は深刻になり夜半の十二時まで寢食を忘れての質疑応答があった。末世には戒行（仏教道德の実践）をまもる者がいない。戒行は仏教の根本でこれがまもられなければ仏教は滅びる。だが戒行すらまもれない人々が救われる道が一つある。それは阿弥陀仏におすがりして本願のお念仏を申し浄土に往生することであると教えられた。鎮西上人が思われるにはこれは素晴らしい有難い教えである。今まで何も知らなかったと、いそいで塔仏を負うて郷里へ納め、学頭の地位や住職までも辞して法然上人の座下へ戻られた。昔の人は道を求めるために地位や名譽もすててひたむきに歩む。前後八年間法然上人のもとへ通い続けられた。ある時法然上人の常随のお弟子の真観房感西という人が、「あなたのようにそう毎日一日も休まず来られては師匠がおつかれになるから隔日にして下さい」といったので、鎮西上人もなるほどと思って隔日にしたところ法然上人は「聖光房は今日は何故来ぬか。早く来るように呼べ」と仰有ったので、又もとのように通い続け、八年たって一切の教をうけ、郷里に帰り念仏の法門をひろめられた。鎮西上人は法然上人が念仏して往生すると申され

たその往生とは「念死念仏」であると解釈されている。死というものを徹底して考えるならば、お念仏を申さずにはいられない。交通事故の即死のような死でない。人生生活につながる死というものは覚悟がいる。覚悟が出来た死こそ往生である。昔の武士が切腹する時、介錯が「覚悟はよいか」と尋ねる。「よい」と答を得て首を刎ねる。往生はそのような残酷な処刑ではない。しかし人間の終末の覚悟を忘れてはならないのである。

## 一 苦難のおしえ

教をとき道をとく者も食わねばならぬ。現代は経済生活が中心になって、小学生すらお金のことを口にする。まして大人は朝起きて夜寝るまで借金という。お金さえあれば何でも出来るという觀念が脳裏から消えない。人生はお金のことばかりではない筈である。

浄土宗三代の祖師良忠上人（記主禪師然阿）は鎮西上人から教の皆伝を得て、師命により関東へ開教の旅に出られた。開教師の使命は骨をその地に埋める覚悟がいる。キリスト教の宣教師でも外国から日本へ来て、日本で生涯を終える人が多い。明治大正時代は草鞋ばきで信者を

つくるため一人二人と説いて廻ったという。

良忠上人は関東武士を相手に経済的なトラブルに悩まれた。微録の武士椎那八郎という者がいた。ある時上人に向って「私は貧乏武士だが上人を養って上げた」と高言したので上人は「何も貴方に養って貰った覚えはない」といわれたので八郎は「これはしたり、形だけでも坊舎一棟と田一町を進上したのに扶養をうけていないとは何ということか」と色をなした。「在家の田畠だから値段をつけて買取ったものだ」「そんなことがあるものか上人の住宅というならば、入居の後何年何月に値段をつけましたか」「その時の費用何貫何百を渡したではないか。それが買った値段と違うというのか」「私は禄も少ない武士だから用立てに下されたものと思っている。鎌倉の上下の者も同じで、これは買値の金ではない」「私は僧侶で貧乏無縁の者だ、どうして自分の身命をすべてよその地頭に用立せなければならん理由があるか。買ったものは買ったものだ返す意志はない」といわれたので椎那八郎は返す言葉がなくて下った。

また荒見弥四郎という家臣がいた。ある時一町五段の田を寄進して不断念仏のころざしにとし、後に三町の田を寄進するといった。良忠上人は非常に喜ばれて、先

づ旧家をこぼち飯御堂とし、大門の左右に六列の寺地を区分された。その中の一地区に早速門弟の性真が庵室を造った。他を役僧（とき衆）に配分しようと計画を立てられていた。ところが種撒時になったが、一向に寄進する様子がない。弥四郎の親類筋にあたる運光房は名主の出であるが、見かねて、在家と出家とは慣例がちがう。在家の法は田畠を寄進する場合は始めに永代の事を約し、後に酒肴を出して事を定める。もし弥四郎もこのように思っているのかもしれない。なるほどそういうこともあろうと良忠上人は酒を造らせ、学衆に珍物を持ち集めさせて珍味を山のように与えて饗応された。なおおまけに十貫匁の金を地主に二貫匁を政所の三郎兵衛へ、そして三貫の金を其の者へ与えられた。しかし政所から今年に代替地がないから来年まで待たれよとのことであった。流石の良忠上人も心穏かでなかった。田舎の奴は盗人だと漏らされた。こんな土地には居れないから鎌倉へ行こうとされた。今まで聴聞に来た者も来ぬようになり人足や馬足を依頼しても寄って来ない。一物残らず移すのだから荷物が多い。弟子達が苦心して、竹で造って籠に荷物を夥しく入れ、馬の口をとって道中した。道行く人は何だろうと目を見張ったという。そうして鎌倉大仏

の浄光聖に寄寓し、弟子達は商売のアルバイトをしながら良忠上人の講義を聴いたというから悲惨である。

現代でも寺の寺地を借りあるいは借家に住む者にも随分目にあまるのがある。口先だけよいことをいって寺の得分を貪ろうとする人間が昔も今もいることであろう。

法然上人は

『一百四十五箇条問答』に、

一、僧の物くひ候も、つみにて候か。

答 つみうるも候、えぬも候、仏のもの奉加結縁の物

くふはつみ。

といわれている。良忠上人の門弟教養の苦勞は、僧団と信者との現実的な問題をなげかけている。

＝ 先月号でお知らせいたしましたように、本会会費を諸事情により値上げいたしました。意をくみとりよろしくお取り図いの程お願い申しあげます。

＝ お願

＝ 新会費（年額一、二〇〇円・旧一、〇〇〇円）

|   |   |
|---|---|
| 手 | 仏 |
| び | 教 |
|   | の |

<2>

## 仏教の宗派について

### — 天台と真言 —

問 日本の仏教には沢山の宗派がありますが、なぜこのようにな宗教派が起ったのでしょうか。

答 ご承知の通り、宗派のみなもとをたどるならば、いずれもお釈迦さまの教えがもとになっているのです。いいかえますと、インドの仏教、釈尊の弟子、その地方の風習などやその後の新思想にまでさかのぼりますが、わが国に入っているような宗派が実際に成立したのは、中国に仏教が伝えられてからのことでもあります。

中国において訳出された多くのお経のうちから、自分たちの心をひきつけたお経を選んで価値判定をするようになったのです。これを仏教では「教相判釈」といっております。それによっておのおの特定のお経をよりどころとする宗派ができてきたのです。

ただし、そのころは、宗派というよりは学派という程度のものであったのが、時の流れとともに発展し一宗派となってわが国にも入ってきたのです。しかし、わが国における宗派は、中国のものがそのまま伝わったものではなくて、それらを根本として新しくおこった宗派、わが国独自の立場において開創されたものであるといえましょう。

問 天台宗も中国から伝えられたものでしょうか。

答 天台宗という宗派の名前のおこりはそうです。中国の僧で、智者大師智顗（ちぎ）という人がおりますが、この方が中国の浙江省の東部にそびえている天台山という山の中に住んで修学弘法に努められたので、人びとはこの僧を天台大師と呼んでいたところから、この名前がでたといわれています。

問 その教えの特色はどういうことでしょうか。

答 それはお釈迦さまの説かれた沢山のお経のなかで、法華経が最高の教えであり、最も勝れた經典であるといふのです。そのほかのお経は、法華経の精神を示すために説かれたいわば序説的なものであるとしています。天台宗は、この法華経をよりどころとして、万人成仏といって、すべての人がすくわれると主唱する宗派です。

天台宗を一宗としてわが国に創定したのは伝教大師最澄であります。

問 伝教大師という方はどこで勉強されたのですか。

答 中国、すなわちその当時の唐の国に渡って天台の奥義を学び、さらに真言、禪を学んで帰国されました。そして、天台、密教、禪、戒の四宗を一丸とする一宗として、天台宗を弘められたのであります。そのために中国のそれとは大いにその趣きを異にしています。

本来、天台宗は理論をその中心とするのですが、わが国においては、実践修練の行法を重んじています。また、天台宗においてその特色をあげるならば、鎮護国家、国利民福をは

たじろしとして、国家仏教として伝播したことであります。しかし、これは、天台宗にかぎったことではなくて、日本に仏教が伝えられた当初においては、すべてが護国安民の精神で興隆したということができましよう。

問 私たちは、日本歴史で最澄と空海について学んだことがあります。すが、つぎに空海について教えてください。

答 空海とは弘法大師のことです。幼名は真魚といい、のちに無空と改めて修学し、二十歳のとき出家得度して名前を空海と改めたのであります。

問 弘法大師は真言宗を開かれたのですか。

答 その通りです。真言宗では弘法大師を宗祖と仰いでいますが、真言宗と名づけられたのは、金剛頂経というお経のなかに、真言陀羅尼宗とあるところからとられたといわれています。そして真言宗は大別して古義、新義の二宗派にわかれており、新義真言宗は豊山・智山の二派、古義真言宗は高野山、醍醐寺、大覚寺、仁和寺、東寺など多くの派にわかれ現在に至っております。

# 道

## 十輪寺への道

高橋義和

兵庫県高砂市の十輪寺は、西山禪林寺派の末寺で、いわゆる同派のなかでの檀林の寺格を有する名刹である。

伽藍も立派であり、そして名刹としての格調をもっている寺院であるが、この寺が法然上人四国流罪の際の道すがらにあたる。

建永二年（一二〇七）に、例の住蓮、安楽の事件で、上人が四国流罪をうけて、讃岐に赴く途中、この地に立ち寄っている。

元来高砂は海辺であり、昔からの漁港であつたらしい。

京都を出た法然上人が、この海辺で、漁師を心導したのである。

そのときのことを、四十八巻伝の第三十四、配所御下向の巻の漁夫教化のところに、

播磨の国高砂の浦につき給ふに、人おほく結縁しける中に、七旬あまりの老翁、六十あまりの老女夫婦なりけるが

申しけるには、「わが身はこの浦のあまなり、おさなくよりすなごりを業とし、あしたゆうべいろくづの命をたちて、世をわたるはかりごととす。ものの命をころすものは、地獄におちてくるしみたへがたく侍るなるに、いかがしてこれをまぬがれ侍るべき、たすけさせ給へ」とて手をあはせけるなきけり云々とある。

この漁夫に念仏のおしえをすすめ、「手にすなごりすることやまざりけれども、口には名号を称へ往生をとげるよしつたへき給ひて」とある。

この寺の本堂の西に墓があつて、そのなかに、「願空浄海法子」というのと、「乗空智海法尼」という二つの石碑がある。

その石碑の右側には、この人の略歴を記しているが、その終りに「明和六年丑三月」の建立の日時が記されている。

これは明らかに法然上人の化益をうけた、この漁夫の法名であつて、その老漁夫は、八田治郎太夫と称するらしく、もう一つの碑はその妻のであるらしい。

この寺は弘仁六年（八一五）の建立で、弘法大師が勅賜によつて鎮護国家の道場として、建立されたものであり、昔は地藏菩薩を安置したから、地藏所と称したらしい。

西山派になったのは信敦坊なる人が、法然上人をもつて中興の第一世とし、自分は第二世となつて禪林寺派の末寺として今日まできているが、この寺の山号を宝瓶山と称している。

法然上人の歿後、三百年を経たころの大永七年（一五二八）に、堺市の長泉寺を開いた十萬上人が、法然上人へのおしえを慕い讃岐の配流の地、生福寺に赴き、同寺にある上人の御影を譲りうけてきたのだ、とつたえられている。

その御影は、法然上人が配流のとき、今の香川県の中央を流れる綾川で、その水に姿を写して画いたという、御影であつて、頭の頂に、宝瓶をいただく御影であるので、宝瓶の御影と被している。

十萬上人は、それを請うてかえる途中、この高砂についたときに、十輪寺にたちより、この寺の本堂に安置したところ、近隣から、法然上人の徳を慕つた、有縁、無縁の善男善女が寺に押しよせて、参拝者がつづいたというところから、

遂にこの寺に宝瓶の御影を安置することになったものといわれている。

であるから、宝瓶山という山号は、ずーつとあとのこと、この御影が安置されてからであると思う。法然上人の自画自讃ということであるから、数少ない御影であろうと思う。

足利時代になつて、足利義晴が五百石を寄進し、また、文禄年間には、豊臣秀吉が、征韓の役に際して、溺死した村人九十六名のために建てた、石塔婆九十余墓がある。

そのなかの中央の宝塔は、高麗仏であるから、朝鮮からもちかえたものであるらしい。

ここから室津へは、海岸沿いの道を、かなりあるが、ここは遊女の化益のところであり、上人は讃岐からの帰途ここに立ち寄つたような伝説もあるが、そのことの真疑はこれからのことにしたい。

高砂も最近ますます便利になり、国鉄の加古川駅から、高砂線へ、駅からすぐであり、山陽電鉄でなら、高砂駅下車しても十分あれば、充分赴くことが出来るところである。

室津とともに、法然上人が民衆のために化益した遺跡としては、この高砂もまことに縁りの深いところであつて、上人の墓碑にある昭和六年は法然上人の歿後五百五十二年にあたるから、後世の人が昔を偲んでの建立であらう。

## 浄土宗列祖の

### 墨蹟をたずねて

于時長享三<sup>巳</sup> 綏孟夏十五日

以祖師法然上人御点之正本而

写之訖

東山大谷知恩院廿一代住持棟蓮社周誉（花押）

右此本黙者以元祖法然上人御黙之正本而

写者之也、可為末代証本者歟

于時長享三<sup>巳</sup> 綏六月廿五日

東山大谷知恩院廿一代周誉（花押）

『御法興院政家日記』の応仁二年九月二十一日条をみると、栗田口一休が戦火にあったことがわかる。いわゆる応仁の大乱である。当然知恩院も兵火はまぬがれなかったろう。

この時の住職が周誉珠琳であった。

祖山に於ける珠琳の活躍はすばらしいものであった。歴代の中でも二十一歳で入院した例もなからう。そして後土御門

院や青蓮院などとうまく関係づけし、知恩院の基盤をつくった人といってもよいほどである。そればかりではなく、文龜三年には「条々」を定め寺内の統制をもはかっている。

この写真は『選択集』（版本）の奥書きである。当然知恩院にあるべきものであるが実は近江の新知恩院に所蔵されている。それというのも、珠琳が応仁の大乱の戦火をさけて青蓮院の所領であった近江伊香庄に行った。それも伝法関係、重宝、宗祖の木像などを持ち一時難をさけたのである。当時知恩院が青蓮院の勢力下にあったけれど、それにしても珠琳の立廻りの良さを認めたい。そうした面とは別に教学面においてもすばらしいことがこの『選択集』の書込みなどから知れる。また新知恩院に現蔵されている伝書の奥書などからしても高く宗史上評価しなければならぬ。

珠琳の書体というものは、極めて几帳面な性格の一端が偲ばれる。一画一画丁寧に記し、なおかつ他のものをみると大胆なところもある。書体からしてもその活躍が充分わかる。それとは別に『選択集』の諸本との厳密な校合によりこの本の良さがさらにわかる。

新知恩院の史料を探訪したのは五、六年前であった。同院の裏側の室町庭園に立たずんだ時の感動がこの写真をもつたに思い起こされるのである。

（田中祥雄）

知恩院21世周譽殊琳筆  
『選採集』（版本の奥書）

聖道寺三篇二行篇三本願寺篇四三篇  
五念佛篇六獨留念佛篇七光明攝受篇八三心念佛篇  
九念佛四篇十化佛攝受篇十一念佛攝受篇十二付為念佛篇  
十三念佛攝受篇十四念佛攝受篇十五念佛攝受篇  
十六念佛攝受篇十七念佛攝受篇十八念佛攝受篇  
十九念佛攝受篇二十念佛攝受篇二十一念佛攝受篇  
二十二念佛攝受篇二十三念佛攝受篇二十四念佛攝受篇  
二十五念佛攝受篇二十六念佛攝受篇二十七念佛攝受篇  
二十八念佛攝受篇二十九念佛攝受篇三十念佛攝受篇  
三十一念佛攝受篇三十二念佛攝受篇三十三念佛攝受篇  
三十四念佛攝受篇三十五念佛攝受篇三十六念佛攝受篇  
三十七念佛攝受篇三十八念佛攝受篇三十九念佛攝受篇  
四十念佛攝受篇四十一念佛攝受篇四十二念佛攝受篇  
四十三念佛攝受篇四十四念佛攝受篇四十五念佛攝受篇  
四十六念佛攝受篇四十七念佛攝受篇四十八念佛攝受篇  
四十九念佛攝受篇五十念佛攝受篇五十一念佛攝受篇  
五十二念佛攝受篇五十三念佛攝受篇五十四念佛攝受篇  
五十五念佛攝受篇五十六念佛攝受篇五十七念佛攝受篇  
五十八念佛攝受篇五十九念佛攝受篇六十念佛攝受篇  
六十一念佛攝受篇六十二念佛攝受篇六十三念佛攝受篇  
六十四念佛攝受篇六十五念佛攝受篇六十六念佛攝受篇  
六十七念佛攝受篇六十八念佛攝受篇六十九念佛攝受篇  
七十念佛攝受篇七十一念佛攝受篇七十二念佛攝受篇  
七十三念佛攝受篇七十四念佛攝受篇七十五念佛攝受篇  
七十六念佛攝受篇七十七念佛攝受篇七十八念佛攝受篇  
七十九念佛攝受篇八十念佛攝受篇八十一念佛攝受篇  
八十二念佛攝受篇八十三念佛攝受篇八十四念佛攝受篇  
八十五念佛攝受篇八十六念佛攝受篇八十七念佛攝受篇  
八十八念佛攝受篇八十九念佛攝受篇九十念佛攝受篇  
九十一念佛攝受篇九十二念佛攝受篇九十三念佛攝受篇  
九十四念佛攝受篇九十五念佛攝受篇九十六念佛攝受篇  
九十七念佛攝受篇九十八念佛攝受篇九十九念佛攝受篇  
一百念佛攝受篇

右本默者以元祖法然上人御點正本而  
寫之者也可為未代證本者歟

千特長亭三前稿六月廿五日  
東山大谷知恩院廿一代住持周譽殊琳筆

千特長亭三前稿五月十五日  
以祖師法然上人御點正本而  
寫之也

東山大谷知恩院廿一代住持周譽殊琳筆

近世新知恩院藏

|                 |                             |                                 |               |                                                                   |                                                                          |                                                                               |
|-----------------|-----------------------------|---------------------------------|---------------|-------------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------|
| <p>「浄土」購読規定</p> | <p>一部 定価 百円<br/>(送料十二円)</p> | <p>会費一力年金一、二〇〇円<br/>(送料 不要)</p> | <p>浄土 四月号</p> | <p>昭和十年五月二日<br/>昭和四十七年三月二十五日印刷<br/>昭和四十七年四月一日 発行<br/>第三種郵便物認可</p> | <p>定価 百円</p> <p>編集人 宮林 昭彦<br/>発行人 佐藤 密雄<br/>印刷人 関 二三男<br/>印刷所 三幸社印刷所</p> | <p>東京都千代田区飯田橋一ノ十一ノ六<br/>発行所 法然上人鑽仰会<br/>電話東京二六二局五九四四番<br/>〒一〇二 振替東京八二一八七番</p> |
|-----------------|-----------------------------|---------------------------------|---------------|-------------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------|

日韓提携により韓国々宝を初めて全巻刊行

# 高麗大藏經 影印本

寺宝に/学究の座右に/寺院への寄贈に…

- 700余年を経た古典 (造本・体裁)
- 超宗派の原典 縦 37cm
- 世界唯一の経板による 横 27cm
- 完璧な集録 厚さ 7cm
- 写影であるから1字1句誤りがない

ご契約を戴いた節は、国宝にふさわしい書架、般若經の額を贈呈致しております。

ご要望により、カタログの送付又は係員が参上の上御説明申し上げます。

## アジア文化事業株式会社

代表取締役 市田 一 夫

東京都新宿区西新宿8-3-31  
電話 東京(03)3371-0125(代表)



(ページ数)平均1150ページ

《前田聰瑞・大野法道・中村弁康編》 本会発行

三 碩 学 『浄土宗読本』 覆刻版  
の 名 著

価 1000 円 千 150 円

時代を越えて浄土宗の真髄を平易に説いた不朽の入門書を浄土開宗八百年を期して世に贈る。浄土信仰の意味と価値・法然上人の念仏の教えを日常生活に実現する仕方・仏教徒としての心得等々。この一冊あれば浄土宗は勿論仏教のすべてがよくわかる無類の名著。

取扱所 法然上人鑽仰会